

# 大人ができること

藤村靖之 ふじむら やすゆき  
非電化工房代表／日本大学工学部教授(工学博士)

2011年3月11日、福島第一原発でレベル7の事故が起きてしまいました。僕は打ちのめされました。原発事故を危惧し、本気で原発建設に反対してきたつもりだったからです。本気度が足りなかったことにも思い至りました。打ちのめされながらも、放射線量は測っていました。この町の子供たちのことが気がかりだったからです。

はじめは楽観的でした。僕たちが住む栃木県那須町は、原発からは南西の方向に100kmも離れている上に、原発周辺の風は真南や北西に向かって吹いていることがわかっていたからです。ところが、真南に運ばれた放射性物質は、やがて東風に乗ってこちらに向かってきます。北西に運ばれたものも南向きにカーブしてこちらに向かいます。

3月11日に0.05(マイクロシーベルト/時)だった空間放射線量率は、0.2, 0.4, 0.8, ……と日ごとに上がり続けます。土壌表面の放射能汚染度も200(ベクレル/kg), 400, 800, ……と急上昇します。この町に永く住む子供たちの安全を、何もしないで守れるレベルは超えたと思わざるを得ない値に、やがて至ります。福島市と大差のない放射線量です。チェルノブイリ原発事故後に目の当たりにしたベラルーシの子供たちの姿と、この町の子供たちの未来が重なりあって見えるような気分におそわれました。紛れもなく僕たち大人が引き起こした原発事故で、子供たちが被害を受け続けるのは理不尽です。なんとかしないと……と考えているうちに気持ちがシャンとなりました。

4月11日、那須町で緊急講演会が開かれました。広い会場は満員の聴衆で埋まりました。子をもつ親たちの多くが放射能に脅えていたからです。

他県への移住を真剣に考えている家族も少なからずいらっしやいました。生後1カ月の乳幼児の母親は、「母乳を介して幼児が放射能汚染する……という友人からの忠告にしたがって授乳を止めているが、本当に授乳してはいけないのか」と涙ながらに問いかけます。「奇形児が生まれるから結婚はできない」と揶揄された20歳の女性は「本当に結婚できないのか」と涙を流しながら質問します。突然の放射能汚染に見舞われ、「どうなるかわからない」「どうしていいかわからない」のですから脅えるのは当然のことです。原発に依存しながらも放射能のことがまったく学ばなかった、この国の知性の有りようを改めて痛感しました。

だから僕は、「この町はすでに低濃度放射能汚染されてしまった。なにも対策しなければ子供たちの安全を確実に守ることは難しい。勇気を出してそのことを認めよう。そして覚悟を定めよう」と呼びかけてみました。どういう覚悟かと言うと、「この程度の低濃度汚染であれば、大人の方で子供の安全を守ることはできる。そのことに徹しよう！」という覚悟です。集まった大人の覚悟は速やかに定まったようです。そして、5月9日には住民プロジェクト『那須を希望の砦にしよう』のキックオフ講演会開催に至ります。500人規模の住民プロジェクトがスタートしました。

出し合った何百万円かのお金で放射線測定器をたくさん購入しました。最も信頼度が高いと考えた測定器に統一しました。放射線の測定は機種によって大きくばらつくからです。疑念が生じるような測定では対策そのものが非科学的になって遂には挫折してしまうことをおそれたからでもあり

ます。放射線被曝についての勉強もしっかりとやっていたと思います。とかくヒステリックになりがちな住民運動を理性的なものに留めたかったからです。子供部屋・リビングルーム・家の庭・通学路・公園・校庭・野菜・土・水……、計測の講習を受けた人たちが気がかりなところをすべて測定します。最終的には1000人以上が数十台の計器で至るところを測定しました。町全体の99%が要対策地域であること、子供の外部被曝量の約80%は自宅の室内における被曝であること、室内の放射線量は周囲の地面と屋根の上の放射性物質からの放射線が壁と屋根を貫いてきたものがほとんどであること、……子供たちの外部被曝状況は限なく明らかになりました。

そして外部被曝対策に進むのですが、除染の困難さという壁に突き当たります。当初の楽観を戒められて研究を重ねた結果、除染のテクニックも徐々に身に着きつつあります。予断は許されませんが、可能性が仄かに見えてきたようです。

野菜や穀物の放射能汚染度も調査し、子供たちの内部被曝についても分析しました。畑の土壌の汚染度や、土壌から野菜への放射能移行係数も調査し、当地で生産する野菜や穀物の放射能汚染度を下げる研究も始められています。野菜や穀物に含まれる放射性セシウムは1kgあたり37ベクレル、牛乳は10ベクレル以下を守ることを申し合わせ、住民と生産者と行政とが力を合わせて活動を進めています。37や10は「安全の基準」ではなく「納得の基準」であることは申すまでもありません。

「危険だ、逃げろ！」という意見が主として市民活動を担っている方から多く寄せられました。「100ミリシーベルト以下は安全だ、気にするな！」という意見が放射線医学の専門家や国から寄せられました。日本中が両極端の意見の狭間で翻弄され続けてきたような印象があります。「安全か危険か?」「100ミリシーベルトか1ミリシーベルトか?」といった議論がこの那須町でも当初は盛んに行われました。しかし、議論が続いている間は大人に行動は生まれず、子供の被曝量は

積み重ねられることに気づきました。永久に結論が出ないであろうこの種の議論をしている余裕を僕たちは持ち合わせていません。だから、僕たちはこの種の議論を止めることにしました。高名な学者と企業と政府とが「科学的に証明されていないから原因ではない」と論陣を張り被害を徒に拡大してきたこの国の残念な風習は、水俣病や薬害エイズなど枚挙にいとまがありません。その愚をここで再び繰り返すことに僕たちは反対します。

大人の方で子供の安全を守ることが本当にできているのか? 結果は何年か先にならないとわかりません。子供たちの被曝障害を完全にゼロにすることは、きっと叶わないことなのでしょう。でも、大人が力を合わせて科学的に努力すれば、努力しただけゼロに近づけることはできると、僕たちは信じています。それが原発事故を起こしてしまった大人たちの最低の責任だと僕たちは思っています。